Wheelchair tennis

車いすテニス

男女別のシングルス、ダブルスのほか混合もあり、リオデジャネイロ・パラリンピックでは国枝慎吾が男子シングルス3連覇を狙う。彼の「代名詞」にもなっている強烈なバックハンドのトップスピンを武器に、超攻撃的テニスで長く世界王者として君臨している。女子も、2014年にダブルスで四大大会制覇を達成し世界ランク1位にもなった上地結衣がいて、日本人選手がそろって金メダルを取る可能性もある。ツーバウンドが認められている以外は一般のテニスとほぼ同じルール。コートの広さ、ネットの高さ、使用するボールも同じだ。

競技用車いすは車輪がハの字に開き、急発進や急旋回がしやすい。選手は打った次の瞬間に次にボールが来る場所を予想して、ラケットを握ったまま車いすを操作し移動する。車いすでは サイドステップができず、一般のテニスと比べて球を拾えない範囲が広くなる分、相手の動きや狙いを読んだ素早い移動が必要になる。その駆け引きにも注目したい。

浦沢直樹

2002年デビュー。1988年から「YAWARA!」を連載し、当時に女子柔道ブームを巻き起こす。1993年から連載の「HAPPY!!」で婚活を読み続ける不屈のヒロインを描く。また「MONSTER」「20世紀少年」「PLUTO」(原作・手塚治虫、長崎尚志プロデュース 監修・手塚眞)など幅広い作風で読者に圧倒的な支持を得る。現在「ミーニング」にて「BILLY BAT」(ストーリー:浦賀和宏/長崎尚志)連載中。

Photograph by Rieko Ueki

Football 5-a-side

5人制サッカー(ブラインドサッカー)

「ブラサカ」の愛称で親しまれる視覚障害者の5人制サッカー。ゴールキーパーは目が見える人や弱視の人が担当し、ほかの4人は条件を同じにするためにアイマスクを装着する。試合時間は前後半25分の計50分。フットサルと同じ広さのコートを使う。

転がすと音がなる特殊なボールや敵陣ゴール直に立つガイド(コーラー)などからの声、選手たちの足音、音づかいなどを頼りにゴールを狙う。4人はヘッドギアも装着するが、危険な衝突を避けるため、ボールを持った相手選手に向かっていく際は「ボイ」(スペイン語で「行く」の意味)と声を出す決まりだ。

ピッチを駆ける彼らのスピード、パスの正確さ、フェイントのうまさや狙いすましたシュートなどは視覚障害を感じさせない。コミュニケーションが競技の鍵を握るため、社員研修にブラサカを取り入れる企業もある。

観戦中は静かにすること。だが、ゴールが決まったら大歓声で選手をたたえたい。

高橋陽一

1980年「キャプテン翼」でデビュー。翌年に連載開始後、アニメ・映画・ゲーム化を果たし、サッカーブームの立役者となった。アニメは国外でも放映され、国内外問わずプロサッカー選手に影響を与えるなどサッカーマンガの金字塔として今なお根強いファンを持つ。主人公が所属したチームと同名の「横浜SC」(敵役・赤西子)もあり、読者の家族と盛り上がりを支えている。

Athletics

陸上競技

身体障害や、知的障害、脳性まひなどさまざまな選手が参加するため、障害の種類や程度によってクラス分けされている。

一般の陸上競技とルールに大きな違いはない。車いすの選手は「レーサー」と呼ばれる競技用車いすに乗り、トップ選手のスピードは時速30キロ以上。下り坂では50キロ以上にもなる。足を切断した選手は義肢「板バネ」と呼ばれる義足を装着。地面を蹴る際の反発力が強いので、それに負けない筋力が必要だ。視覚障害の選手の目になるのは伴走者。ひもを握り合い、選手を誘導する。

用具の進化とともに選手のパフォーマンスも上がり、海外ではひざ下切断の義足選手マルクス・レーム(独)が障害者大会の走り幅跳びで8メートル40センチを記録。一般の大会でも優勝した。2015年の障害者陸上世界選手権では大腿切断の走り幅跳びで山本篤が、知的障害の5000メートルで中川大輝がそれぞれ優勝。車いす400メートルで佐藤友祈、上与那原寛和が1、2位でゴール。日本人も世界のトップを狙える。

窪之内英策

1998年デビュー。1999年に連載を開始した『百歩の男』を中心に陸上関係の作品を多く描いている。スポーツ漫画の王道ともいえる『ハルフ』がヒット。国内外で映像化され、文庫化されたこの作品は、『ハルフ』『ハルフ』『ハルフ』